

ソルトレイク冬季オリンピックやワールドカップも終わり、春の気配が漂うこの時期にこのような原稿を書くのは季節はずれもいいところだが、しかし、一言は言っておきたい。スポーツの最高峰であるはずのオリンピックはやはり「スポーツ」の本来あるべき姿を示して欲しい……。

事のはじめは……

ソルトレイクオリンピックのフィギアスケート競技での出来事、11日のペア・フリーでは、ジャンプで明らかなミスがあったエレナ・ベレズナヤ、アントン・シハルリゼ組（ロシア）が、ミスなく演技したジェイミー・サレー、デビッド・ペルティエ組（カナダ）を抑えて優勝した。このことで、ジャッジの採点に対して疑問の声が米国、カナダのマスコミを中心に高まっている。カナダ組の2位が決まると、観客からは大きなブーイングが起きた。また、記者会見でも、ベレズナヤ、シハルリゼに対し、「金メダルという判断は正しいと思うか」といった質問が飛び交うほどであった。

採点疑惑……？

疑惑の内容は「フランスのアビトボル&ベルナディス組が怪我のため急きょ出場をキャンセルしてしまったため、ロシア・東欧諸国がベレズナヤ&シハルリゼ組（ロシア）に有利な採点になるよう、フランス人ジャッジと談合。この結果、サレー&ペルティエ組（カナダ）がほぼノーミスの演技を見せたにも関わらず、明らかなミスを行っているロシア組を、フランス人ジャッジは「1位」と採点した。」というものである。

国際オリンピック委員会（IOC）のカラード事務局長は12日の記者会見で、11日に行われたフィギュアスケート・ペアの採点について、カナダ選手団が国際スケート連盟（ISU）に抗議し、ISUは、事実を究明すると返答したことを明らかにした。

そして結果は……？

ISUは「採点疑惑」に詳細に触れることはなく、審判制度の改善を提示。人数を増やすことで審判一人ひとりの影響力を減らすことを表明。疑惑の真意は闇に葬られる形となった。その代わりというわけではないが、サレー&ペルティエ組（カナダ）にも金メダル授与することとなったのである。

私見ながら……

今回の件は、その後のショートトラック競技での逆転劇も含め、「国」対「国」の競争に選手が利用されている観が否めない。マスコミも国ごとの金メダル獲得数を連日放送（銀以下でも評価が随分低い）。まるで優秀なスポーツ選手を有する国が優れているかのような錯覚すら起こさせる。今回の疑惑騒動は政治的決着である。我々が知りたかったことは採点の過程でどのような出来事があったのかである。また、いくら問題があったとしても、一度審判が決めた結果を観客や組織が覆すことはあってはならないことだと思う。

「参加することに意義がある」といわれた国際スポーツの祭典、オリンピック……今や、マスコミを中心とした企業の営利の餌であり、選手個人よりも政治的な色合いの濃い、何とも魅力のないものになってしまったと感じているのは私だけであろうか……？

オリンピックについて鋭い視点を投げかけているスポーツジャーナリスト、谷口源太郎の言葉を引用してまとめにかえたい。

疑惑に切り込まない日本の大新聞 五輪翼賛報道

2002年ソルトレイクシティ冬季五輪招致に絡む買収疑惑にメスが入れたのはいいが、遅きに失したという印象は拭えない。というのも、金権体質のサマランチ体制（1980年～）になった直後から、五輪招致競争での買収工作が行なわれるようになり、急速に日常化してきていたからだ。

それにもかかわらず、今日まで問題として表面化しなかったのには、大きく2つの原因があげられる。ひとつは、サマランチ会長の影響力が強化され、内部批判を封じ込めていったこと。そしてもうひとつは、五輪でより有利な商売をするためにIOCに取り入ることを重視したメディアが調査報道、批判報道を避けてきたことだ。

だが、ソルトレイクシティの疑惑が表面化したことで、海外のメディアは、これまでと違って積極的に疑惑解明に取り組むとともに、サマランチ会長の責任を厳しく問う姿勢を見せている。翻って日本の新聞はどうであろうか。長野にも調査が及んできたというのに疑惑を解明すべく、切り込んでいこうという姿勢がみられない。

それは当然かもしれない。なにしろ、地元で圧倒的な影響力を持つ信濃毎日新聞が招致の片棒を担いだために批判報道を棚上げしてしまった。そればかりか、他の大新聞もこぞって大会に取り入ることに腐心し、批判をタブーとしてきたからだ。その結果、「五輪翼賛体制」といわれるほどの最悪の状態を作ってしまった。招致活動費に関する会計帳簿が行方不明（最近になって焼却したという証言が出てきた）といった不正行為さえ追及されず、その他数々の買収疑惑も隠蔽されてしまった。そうした体質の新聞に、いまさら調査報道・批判報道など望むのはどだい無理なことなのだ。新聞が切り込まないかぎり、長野の疑惑は隠蔽されたままで終わるだろう。

（谷口源太郎：スポーツジャーナリスト）http://www.weeklypost.com/jp/990219jp/edit/edit_2.htmlより引用